『比較民俗研究』26. 2011／6

見え隠れするシャマンたちに出会おうとする

クネヒト・ペトロ※

「一定の理論に基づいて体系化された知識と方法」とは学問のごく常識的な定義と認められるだろう。また、このように定義すると、学問は明らかに「偶然」を初め、「運」のような掴み所のない諸事情に何の存在権も与えない。しかし、前もって予測できない「偶然」か「運」のような事情は果たして詳細な研究計画や綿密な学問が辿る方向に全然無関係のものだろうか。自らが辿ってきた学問の道を振り返って見ると、この道程の上では、全くの「偶然」はなかったとしても、「運」が何回も働いたような気がしてやまないのである。過去十年ほど内蒙古で追って来たシャマンの研究についてこうした事情に焦点を当てて、歩んできたその道を非組織的に振り返って見ることにする。

「アルタイ語族の諸民族におけるシャマニズムの研究プロジェクトを作り、科研の研究助成金を申請しよう」という提案を持って中部大学の畑中幸子と黄強の両先生がある日訪ねてきた。晴天の霹靂のような誘いであった。シベリアを初め、アジア大陸でのシャマニズムに随分前から深い関心を持っていたのは事実である。にも関わらず、まさか、今までのように文献の上ではなく、実際に現地に足を入れて生きているシャマニズムを研究する機会が出てくるとは夢にも思っていなかったのである。二人の先生方の誘い通りに申請を提出したら、お陰で運よく研究助成金が下りた。それ故に、彼らが訪ねてきた日は、私がアジア大陸でシャマン研究をする事始めであった。偶然だったかどうかはわからないが、長年持っていた夢が急に叶った「運」、しかも望んでも望めない幸運であったと思う。

助成金が授与されたという嬉しい通知が届いた瞬間に私にとって直ちに幾つかの問題が現実的になった。先ずは、アジア大陸で研究を進めるのに協力を頼めそうな研究者を知らないのはその一つであった。プロジェクトの第一年目に現地で研究できそうな数ヶ所を案内するだけではなく、適切な協力を頼める方々を紹介すると申し出た黄先生の好意でこの問題は解決した。それで助かったが、何時までも先生に頼ることが到底無理なことは明らかであった。それで、自分ひとりが現地で研究できるのに欠かせない重要な前提条件を満たさなくてはならなかった。それは使用する言語であった。研究する地域を内蒙古の東北部に絞った。中国の一地域なので、当然中国語が共通語であるが、これさえも話せない私にとっては、共通語と言っても根本的で大きな問題であった。勿論、現地へ赴く前に少なくともある程度中国語を覚えておけば、この問題は一応解決する可能性があったはずである。けれども、実際にこの問題にもっと深い側面

※ 愛知学院大学非常勤講師

があるのを教えてくれたのは、ある日の何気ないような出来事であった。黄先生と一緒に海拉爾から地方へ行くためにタクシーに乗っていた時に、運転手と話しながら、どのような言葉が話せるかと私たちは訪ねた。彼はダフール族の人なので、勿論ダフール語を話すが、その他に中国語、モンゴル語とエヴェンキ語も話すと言ってから「この位の言葉が出来ないと仕事にならないよ」とさらに付け加えた。つまり、彼にとって、この位の言語を使うのは日常の常識である。彼の発言は、この地方で今後研究しようと思うのに、これらの言葉の内一つも出来ない大学教員である私にとってはショッキングな答えであった。

後に名古屋でこの出来事をモンゴル人の友人である嘉木陽凱朝さんに話し、計画している研究はうまく行えないのではないかという心配を彼に明かした。すると、きっと助けてくれる方を紹介できるので心配しなくてもいいと言われた。友人のこの言葉に元気付けられて、先の光が見えてきた思いがした。彼の仲介で北京の中央民族大学のSampilnorb先生に出会う機会を得た。そして、先生との出会いによって、内蒙古での研究は軌道に乗ったと言っても過言ではないのである。何故なら、先生がその時に紹介して下さった弟子の一人は私の通訳者になっただけではなく、良い案内者にも友人にもなって下さったからである。Erdemtuという彼と彼が持っている多くの友人と教え子などの親切な協力によって相次いで多くのシャマンたちに出会い、彼らの話を聞いたり、儀礼を観察したりする機会を得た。嘉木陽凱朝さんとの話で始まった一連の運がいい結果を生んだと思っているのである。

Erdemtuさんの協力によって、中国語を使わなくてよくなったため共通語の問題が解決した。その結果、シャマンたちとの付き合いの雰囲気が大いに変わってきた。と言うのは、彼らは皆中国語を話すが、自分の母語を話すのはやはりより楽なことだからである。特にシャマンたちは自分の考えや活動について話す場合に、母語を使った方が好ましいと言っただけではなく、母語でしかこのことについて話せないと強調した人もいた。日常生活において中国語を使っても、シャマンとしての行動などを中国語で必ずしも充分に説明できないので、誤解される危険があると時々言われたことがある。しかし、中国語を使いたくない理由には、誤解の危険性と別の理由もあるような気がしている。相手になって下さったシャマンたちにエヴェンキ、ダフールとモンゴルの人が含まれているが、私たちは何時もモンゴル語しか使わなかった。それでも、モンゴル語を使いたくないとか使えないとかの理由をあげて話しを断った人は一人もいないのである。私の推測に過ぎないが、相手になった人たちは皆所謂「少数民族」の人たちばかりなので、一少数民族の言語であるモンゴル語に対して異和感を持たなかったのかも知れない。

なお、研究上で問題になったのは使用する言語だけではなく、通訳者がシャマン業に充分な理解力を持っていないことも深刻な問題であることを痛いほどに教えられたことがある。今年(2010年）の夏に起こった小事件はそれを明らかにした。ある理由で急遽通訳者を変えなければならない必要があった。代わりになってくれた人はシャマンについての予備知識が殆どなかったので、簡単なことについてさえも時々シャマンに説明を求めた。その結果、シャマンはややいらいらした様子で、「誤解されるから、このような人を使うのは駄目だよ」と私を戒めた。と

いうのは、前述したシャマン自身の不充分な表現力も、または我々の不充分な理解力も、両方とも困った誤解の原因になり得ることをシャマンは案じたからであった。

何かの切っ掛けで誤解が生じるのは人間関係に付き物だと言ってもいい位なのに、何故シャマンは誤解されるのをこんなに心配しているのであろうか。このような問いに答え得るのに幾らかのヒントをシャマンが置かれている事情が与えてくれる気がする。私が一番よく会って、その儀礼を観察できるシャマンは毎日と言っていいくらい午前中には病気や家庭内不和などの様々な問題を抱えている数多くの請願者を受け入れて、相談に乗ったり、儀礼を行ったりする。ある日、一人の漢人の女性が家庭内の問題について相談したいと言って来た。しかし、シャマンは彼女の悩みについて立ち入った相談も聞かず、彼女を帰した。この扱い方に少々驚いて、私はシャマンにその理由を尋ねた。そうすると、中国語をうまく話せないから言いたいことが相手に正確に通じるかどうかがわからない。後で不充分な理解によって何かの問題が起こったら、自分は責任を負えないので、最初から受け付けないことにしているという答えを得た。一見、言語の問題だという風に見えるが、もう少し別の要因もあるのではないかと思っている。その要因は中国の現代社会におけるシャマンたちの立場とか評価である。

調査を始めた一番最初の年に出合ったシャマンの一人は病気の治療もよく行った朝鮮族の人であった。医者ではないのに治病するには問題がないかと彼女に尋ねたことがある。その時に言われたことは印象的だったので、よく記憶に残っている。実は、彼女が言ったと同様なことはその後も何回も色んなシャマンたちに繰り返し言われたのである。つまり、彼女が言ったのは、医者ではないからこそ、こういう場合に注意しなければならないのである。そのために、病気を治して欲しいお客さんが来た時に、先ず医者に診てもらったかどうかを確かめる。まだだということなら、医者に先ず診てもらうように指示して、帰す。但し、医者の治療で病気が治らなければまた来てもいいとも言う。そうしなければ、警察がやって来て、面倒なことになる可能性があるという返事であった。漢人の女性との相談に乗らなかった上記のシャマンも断った理由を同じように説明して、自分が取った行為を弁明した。しかし、このような心配を丸で否定しているような事実もある。それは前述の朝鮮族のシャマンの所へ病気を治してもらうために警察官さえもやって来る事実である。

自分が幾らか知っている、現在の内蒙古の東北地方で活躍しているシャマンたちはかなり多いだけではなく、彼らの数が増えつつある傾向を見せているのが事実である。しかし、彼らと話すと上記のような心配に度々出合う。この心配の元の出所はどこにあるのであろうか。単純に言えば、警察が代表している国が現在適用している行政対策にあると言えよう。研究のまだ早い時に海拉爾の宗教局の高官に会って、彼の意見を伺う機会があった。彼に言われたことだが、それによると「シャマンは、悪く言えば迷信だが、よく言えば民俗だ。迷信として科学的知識を重視している現代社会に害を与え得るものである。けれども民俗としてはただの習慣のみだ」ということである。彼ははっきりとそう言わなかったが、彼にとってシャマンが矢張り社会の有害物だという印象を受けた。そして、「この辺では、本当のシャマンが一人しかいない。

その他にシャマンと自称している大体の人は偽シャマンでしかない」とも付け加えた。つまり、行政側はシャマンを原則として現在居ないはずの社会的有害物と見做しているが、その反面、ある者を「本当のシャマン」として認めることもたまにある。けれども、シャマンたちは行政側が彼らに対して見せている否定的な態度を大きな問題として見ている。何故なら、自分たちは社会に決して悪いことしていないどころかむしろ困っている人たちを助けているのだというように自分たちの活動を認識しているからである。

微妙と呼ばざるを得ない彼らが置かれているこの事情を改善する方法はないかと考えている何人かのシャマンたちに出合ったことがある。そしてこの問題について私さえも相談された経験がある。どういうことかというと、憲法で宗教の自由が認められているのに、シャマンたちがこの保護から除外されているのは問題ではないかと彼らは主張している。この事情を改善するために、シャマンたちとシャマンを研究している学者たちが手を組んで、何かの組織を作れば、シャマンたちも諸宗教と同様に正式に認めてもらえるのではないかと考えているシャマンがいる。夢のような話だし、特にたまたま外国からやって来た研究者に協力を頼もうとするのは無理な話だと思っている。しかし、シャマンたちがいかに不安定な立場に立たされているかをよく現している事実だと言えよう。

以上は結論のない話であるが、多くのシャマンたちと出会った自分の経験を振り返ってみると、こうした事情のためにあるシャマンに怒られて、嫌な目に会った時もあった原因がある程度理解できる。しかし、幸いに不愉快な体験は研究全体において僅かなものだけであった。より多くのシャマンたちに実に快く迎えられて、親切に協力してもらった。彼らのこういう態度が私に多くのことを教えてくれたことに心から感謝している。